

そうして、そのしずかなこと…。でんしゃのおとも、じどうしゃのひびきも、にんげんや、いぬのこえも、なにもきこえません。いきたものが、すんでいるのかどうか、わからないくらいです。おしゃべりひめは、しばらくのあいだ、ぼんやり、そのけしきに、みとれていましたが、「ああ、こんなしずかなところにいたら、さぞいいだろう。ひるま、おしゃべりをするひばりや、よなかに、なきまわるかえるがないから、どんなに、うるさくなくていいだろう」とおもいながら、ふと、あしもとをみますと、いっぼんのつたが、たれさがって、ずうっとがけのしたの、いえのほうまで、いっております。おしゃりひめは、すぐに、そのつたをつたって、したへおりはじめました。「もう、このくにへきたら、くちをきくまい。このくにには、あのひばりや、かえるのくちのように、もっとやっぱり、あたしよりも、ずっとひどいおしゃべりがいて、あたしをしゃべりまかして、いじめるにちがない。そうして、おしゃべりさえしなければ、きっとしんせつにしてもらえるにちがない」と、こうおもいながら、おしゃべりひめは、つたにすがって、がけをおりはじ

めました。はじめのうちは、がけが、でこぼこしている
るので、おしゃべりひめは、ちょうど、かいだんをお
りるようにして、つたにすがりながら、おりてゆきま
したが、だんだんしたのほうになりますと、がけがき
ゆうになって、しまいには、まったくちゆうにぶらさ